

松原望先生を送る

高橋 伸夫

東京大学大学院教授 経済学研究科

今からちょうど20年前、筑波大学の明るくて広々としたキャンパスを、颯爽としたスーツ姿の松原先生(当時まだ社会工学系助教授)の後をくっついて闊歩することが、私(大学院生)にとっては快感でした。

バカの壁？

松原先生は、スタンフォード大でPh.D.をとって帰国されてから『決定の数理』(筑摩書房, 1976年), 『意思決定の基礎』(朝倉書店, 1977年)と立て続けにご著書を出版され、私が筑波大学の大学院社会工学研究科に入学した1980年には、既に筑波大学社会工学系の「看板助教授」の風情が漂っていました。当時の大学院生の間での噂では、とにかく日本では数少ないベイズ統計学、統計的決定理論の権威であり、多変量解析をはじめとした統計学でも、とにかく松原先生に指導してもらわないと埒が明かれないと言われていました。そして同時に、そんな松原先生に指導教官をしてもらおうような度胸のある(身の程知らずのバカナ?)大学院生はいないだろうとも噂されていました。

それというのも、当時「管理統計」のセミナーで、なんとThomas S. Fergusonの *Mathematical Statistics: A Decision Theoretic Approach* (1967)を読んでいたからです。これはもう難解というか何というか、私のような文系学部出身者などは、積分の記号の後に $dF(x)$ と書くような記法自体、それまで見たこともありません。思わず「これはミスプリではないのですか?」と聞いてしまうようなレベルの大学院生にとって、もはやこれは太刀打ちできないレベルの高さだったのです。ルベグ積分をはじめ、ボレル集合族だの、シグマ・フィールドだの、語感には格好いいけど、意味がまったくチンプンカンプンの概念に包囲されて、私はそのときはじめて、自分がどんなに頑張っても、どうしても理解できないことがこの世に存在しているのだと知りました。今流行の言葉で言えば、まさに「バカの壁」……。いやいや正直に言いましょ。私は自分が本当にバカだと思い知らされたのです。

私を含めた大学院生側は、もう仕方がないので、とにかく自分がレポーターに当たっている部分については全訳をするしか道がありませんでした。1週間前には「全訳」をした原稿を用意して、そのコピーをとり(当時はまだワープロがなくて、みんな手書きだった)、

そのコピーが真っ黒くなるくらいに書き込みをしながら一生懸命理解に努めるものの、結局は、自分の出番がきたときに、ようやく「どこが分からないのかが分かる」程度になるという感じでした。ですから、私も黒板で途中まで説明してから「これから先はどうなるのでしょうか？」などと間の抜けた質問を松原先生にぶつけていました。

半年ほどたってから『決定の数理』を読んで、ようやく自分が「何を勉強しているのか」が分かって、興奮のあまり、同じ研究室の連中に説明してやると、彼らも「そうだったのか!」と歓喜の声を上げるといった有様です。その頃、統計数理研究所の村上征勝先生が、何度かセミナーに顔を出されることがあって、「こんなに難しいFergusonをきちんと教えられるのは日本では松原先生くらいだからね。私もせっかくだから勉強させてもらおうと思って」という言葉を聞いて、「冗談じゃない。それじゃ分からないのは当たり前じゃないか!」と頭にきたのもその頃でした。

勇敢にも「一番弟子」(?)になる

そんな数学漬けの生活を1年近く続け、毎日の睡眠不足と過労がたたり、とうとう風邪で高熱を発して1週間くらい寝込んでしまいました。ようやく熱も下がってきて、そろそろ修士論文(筑波大では「セカンド・イヤ・エッセイ」と呼んでいた)のテーマでも考えなくてはと思いながら、普段は数学ばかりやらされていて、ろくに見ることもなくなっていた手元にあった経営学の本の何冊かを手に取ったのです。そしてJ. G. March & H. A. Simonの*Organizations* (1958)の翻訳をパラパラめくっていて、私の体に衝撃が走りました(今思うと本当の悪寒だったかも)。そこには、あれだけ苦しめられた統計的決定理論の話が、数式を使わずに、概念として書かれていたのです。

「何たる幸運!」

私は村上先生の言葉を思い出しました。経営学を専攻する学生で、まともに統計的決定理論を勉強したのは、少なくとも日本には私しかいないはずだ(今でも多分そうです)。何しろ、まともに教えられるのは松原先生しかいないのだから。筑波大学に松原先生がいたことは、私にとって幸運以外の何ものでもなかったのです。

私は、さっそく、基本的なアイデアだけを書いた企画書のような研究プランを書き上げて、松原先生のところに持ち込みました。数日後、研究室においてと言われて、松原先生の研究室に行くと、なんと「常磐線の電車の中で読んだけど、面白かったですよ」の一言が。あの松原先生から。ありがたい。私はすかさず「指導教官になってください」とお願いし、快諾してもらいました。私の経営学者としての人生の方向性が大きく決まった瞬間でした。

こうして私は松原先生の「一番弟子」になったのです。実は、かなり後になるまで、私は一番弟子の意味を「最初に弟子になった人」のことだとばかり思っていました。そのため、あちこちで「松原先生の一番弟子です」と何の臆面もなく話していたのですが、ある

とき「弟子の中で最も優れた人」の意味だと知って、まさに汗顔の至り。それ以降は「一番最初の弟子」と言うようになりましたが、幸い、しばらくは博士課程の大学院生で松原先生についていたのは私しかいなかったもので、一応、嘘ではなかったということにしてあります。

駒場にて

そして、冒頭に書いたようなキャンパス内での光景が、今でも記憶に鮮やかに残っているのです。なぜ一緒に歩いてたかという、その頃の私は、修士論文を基にして英文論文を書くように松原先生から勧められていて、何度も筑波学園都市内のファミレスに二人で行って、紅茶とコーヒーだけで何時間も粘って松原先生に直接論文指導をしていただいていたのです。今考えても、あのお忙しいスケジュールの中で、よくあれだけ指導に時間を割いていただけたものだ、一大学教師として頭の下がる思いです。

そして1983年の暮れ近くになって、松原先生の研究室に行くと、「東大教養学部の林周二先生が統計学教室の助手を探しているみたいだけど、どうですか?」というようなお話をいただいたのです。ほとんど即断即決状態で、松原先生に「よろしくお願いします」と頼み込んで、1984年の4月から教養学部の助手として採用されました。その2年後、1986年4月には、今度は松原先生ご自身が、林周二先生の後任の教授として統計学教室に着任。こうして再び、今度は東大駒場キャンパスで、統計学教室の教授と助手という関係での研究生生活が始まりました。これは、一番最初の弟子としては結構幸せな時間でした。その間に博士論文もなんとか書き上げることができました。

もともと、助手には年限があったので、9ヶ月ほどご一緒ただけで、私は1987年1月には、東北大学経済学部にも助教として転出しました。しかし数年たつと、教養学部から今度は助教として戻ってこないかというお話があり、半年ほどの併任期間を経て1991年4月にまた駒場に戻るようになります。実は、私が駒場を離れていたこのわずか4年ほどの間に、駒場ではN問題が起きて、教授会メンバーから何人もの退職者が出ていたのです。松原先生ご自身も大病を患われていました。無事ご快癒され、ホッとしましたが、そんな感じで暗雲に晴れ間が見え始めた頃に、私はまた松原先生の統計学教室に戻り、今度は教授と助教という関係で研究生生活が再開したわけです。

とはいえ、この頃になると、さすがに私の研究テーマも経営学寄りに本業回帰し始めていました。ところが松原先生は、統計学だけではなく、教養主義・人文主義を地で行くような実に幅広い研究領域の設定をされるようになっていました。それは10年ほど比較的小側で先生を見てきた私にとっても驚愕するほどの幅の広さでした。教養学部統計学教室は、林周二先生や中村隆英先生、故村上泰亮先生といった、もともと興味の範囲が広い大物教授で有名でしたが、まさか松原先生までがそのような嗜好をお持ちだとは、私も気がつきませんでした。

しかし、駒場でのそんな幸せな研究生生活も、私に経済学部から誘いがあったことで崩れてしまいます。私は当初、お話に乗るつもりは全くなく、せっかく駒場で、松原先生と教授、助教授の関係でいられるようになったのだから、このまま駒場にいたいと申しあげたのですが、「高橋君のことを考えたら、経済学部に移った方がいい」と明言されて(実をいうと、あれほど強い調子で松原先生が話をされるのを聞いたのは、後にも先にもあのときだけでした)、結局、私は、併任期間を経て、1994年4月には経済学部に移ってしまいました。その間に、松原先生が中心になって進めていたプロジェクト、統計学のテキストのベストセラー『基礎統計学』I・II・III(東京大学出版会、1991年、1994年、1992年)の出版のお仕事にご一緒させていただいたのは、せめてもの慰めでした。また不思議なもので、ほぼ同時期に、40万部以上を売り上げたもう一つの大ベストセラー『知の技法』(東京大学出版会、1994年)にも、ご一緒させていただきました。

無理なお願いばかりで申し訳ありません

ところで、私の駒場時代には教養学部のカリキュラム改革が行われました。『知の技法』などは、まさにその副産物だったわけですが、松原先生と私の所属する統計学教室も大きな転換点を迎つつありました。そこで学生のニーズに合わせて、私は「経営政策科学」「計量社会科学」といった科目を提案したのです。前者は主に私が担当することで了解を取り付けました。しかし問題は後者です。「計量社会科学」を担当する教官は数理的な素養と幅広い学識が必要とされ、並の教官では難しいことは目に見えていたからです。それができるのは松原先生しかいない。私は内心そう思っていました。というより、弟子として、松原先生の教える「計量社会科学」を見てみたかったのです。

そんな私の気持ちを察してか、松原先生は「高橋君、計量社会科学って何ですか?」と半ばあきれながらも、その担当を快く引き受けてくださったのでした。そして、その講義ノートを発展させた『計量社会科学』(東京大学出版会、1997年)まで出版されます。私にも1冊献本していただいたのですが、これはもう感激です。そこには、私の予想をはるかに超えた「松原ワールド」が広がっていました。後に松原先生は、より一般向けに『ゲームとしての社会戦略—計量社会科学で何がわかるか』(丸善ライブラリー、2001年)も著されていますが、こうした一連の著作には、松原先生の駒場時代の思索が詰まっています。私は大好きです。

そして1999年に、今度は松原先生の方が、本郷に新設された新領域創成科学研究科に移ってこられました。それで、当時私のゼミにいた迷える研究者志望の学生、松本渉君が新領域創成科学研究科の1期生として松原先生に指導していただくことになります。それから5年、その松本君がいまや博士論文を執筆中で、松原門下で東大時代最後の博士号取得者になりそうだというのも実に不思議なご縁です。松本君が松原研究室に入る際に言っていた言葉が妙にリアリティーをもって思い出されます。「これで高橋先生と僕は兄弟弟

子ということになるんですね」しかし、私が勇気ある「一番弟子」だったということをお忘れなく。まだまだ君には負けられない。

松原望先生、本当にご苦勞様でした。でも、先生の後ろにくっついて必死に走っている研究者がたくさんいることもお忘れなく。まだまだ引退はさせませんよ。

2003年12月9日